

# ダニエル書 - 第百二号

使者の三重の適用：預言的ダイナミクスを明らかにする

Jeff Pippenger

2024-02-29

エリヤの三重の適用は、神の執行審判の期間において、メッセージ、使者、そして運動を扱う。この執行審判は、アメリカ合衆国における日曜法から始まり、恵みの時の終わりまで続く。執行審判は、神の裁きが憐れみと混じり合っている時期から、最後の七つの災いにおいて憐れみなしにその裁きが注がれる時期へと次第に激しさを増していく。

契約の使者のために道を備える使者の三重の適用は、神の調査審判の終結期においてメッセージ、使者、そして運動を取り扱い、十四万四千人の封印の期間を特定する。その期間は、間もなくアメリカ合衆国で日曜法が制定される時に終わり、その時に神の執行審判が始まる。

バプテスマのヨハネは、ダニエル書九章二十七節の成就として、契約を確認する「契約の使者」であるキリストのために道を備えた。そのことによって彼はまた、キリストが突然ご自分の宮に来てレビの子らを清められるための道も備えたが、これは三年半のご自身の宣教の始めと終わりに主が行われたことである。実際の神殿の清めは、レビの子らとして表される人々の魂の宮を清めるという主の御業の象徴であった。

彼の宮を清めるという文字どおりのわざは預言の成就であり、彼がそのわざをヨハネによる福音書2章13節から22節において成し遂げられたとき、聖霊は弟子たちに旧約聖書の一節を思い起こさせ、それはマラキ書3章の成就として弟子たちを練って清めるという彼の御業の一部であった。

ヨハネによる福音書の箇所では、キリストは、ご自身のからだという神殿が破壊されたときには、三日のうちにそれを起こすと示された。難癖をつけるユダヤ人たちとのやり取りでは、その年にちょうど完成したヘロデによる実際の神殿の改築には四十六年を要したことが付け加えられた。イエスは、御使いたち、聖霊、そして預言者たちの働きを通してご自身の御言葉のうちに定めておられた、預言の言葉に関する規則の一つを実例によって示すことで、弟子たちを清めておられた。

彼は、文字どおりのものが霊的なものを表すという預言的な範例を示した。彼は、神殿の象徴として「四十六」という数の預言的な鍵を据えた。「四十六」は、モーセが山上で神殿のための指示を受けていた日数であった。「四十六」は、人間という神殿を形作る染色体の数である。「四十六」は、異教に続く教皇制によって踏みにじられていた霊的な神殿を回復するのに要した年数（1798年から1844年）である。

二度の宮清めには、三日が四十六年に等しいという象徴が含まれている。そこには、文字どおりの事柄が霊的なものを表すという原則も含まれている。それは、預言の成就であると同時に、預言の予示でもあった。二度の宮清めは、ある人々には誤解され、別の人々には啓示される真理を表している。

二度の清めは、神の教会が「姦淫の世代、まむしのすえ」と呼ばれるほどに墮落し、しるしが彼らに直接説明されているにもかかわらずしるしを求めている、そのような時期を指し示している。というのも、与えられる唯一のしるしは、三日のうちに建て直される神殿の滅びのしるしだからである。

まむしの子らよ、あなたがたは悪い者でありながら、どうして良いことを語ることができようか。心に満ちていることを口が語るのだから。……そのとき、律法学者とパリサイ人のうちのある者たちが答えて言った。「先生、あなたからしるしを見せていただきたい。」しかし、彼は彼らに答えて言われた。「邪悪で姦淫の世代はしるしを求め。しかし、預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられない。ヨナが三日三晩、鯨の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるであろう。」マタイ12:34、38-40。

これらすべての預言的な諸相は、ヨハネによる福音書第2章でそうされたように、契約の使者が突然彼の宮に来るという出来事の三つの成就すべてにおいて現れている。

ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムへ上った。神殿の中で、牛や羊や鳩を売る者たちと、両替人が座っているのを見つけた。イエスは細い縄でむちを作り、羊も牛もろとも彼らをみな神殿から追い出し、両替人の金をまき散らし、台をひっくり返した。そして鳩を売る者たちに言った、「これらをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」弟子たちは、「あなたの家への熱心が、わたしを食い尽くした」と書いてあるのを思い出した。するとユダヤ人たちは彼に答えて言った、「あなたがこんなことをしているのだから、どんなしるしを私たちに見せるのか。」イエスは答えて言った、「この神殿をこわしてみなさい。わたしは三日でそれを建て直す。」ユダヤ人たちは言った、「この神殿は建てるのに四十六年かかったのに、あなたは三日でそれを建てるのか。」しかし、イエスはご自分のからだという神殿のことを言っていた。そこで、イエスが死者の中からよみがえったとき、弟子たちはイエスがこのことを言っていたのを思い出し、聖書とイエスの語ったことばを信じた。ヨハネの福音書 2章13-22節。

契約の使者は、神のことばを表す「銀」と信仰を表す「金」のように、レビの子らを清め、また精錬することになっていた。契約の使者は、御自分の預言の「ことば」への彼らの「信仰」を増し加えることによって、弟子たちを清められる。その預言のことばは清めるために与えられただけでなく、取り除くためにも与えられた。彼の預言のことばは常に「試し」を意味しており、彼が突然ご自分の神殿に来られる時期に、レビの子らはその預言のことばによって精錬される。

「『手に箕を持っておられ、打ち場を徹底的に清め、麦を集めて倉に納められる。』マタイ3章12節。これは清めの時の一つであった。真理の言葉によって、もみ殻が麦からふるい分けられていた。戒めを受け入れるにはあまりにも虚栄と独善に満ち、謙遜な生活を受け入れるにはこの世を愛しすぎていたため、多くの者がイエスから離れていった。今もなお多くの人が同じことをしている。今日も魂は、カペナウムの会堂にいたあの弟子たちのように試されている。真理が心に迫ると、自分の生き方が神の御心にかかっていないことが見えてくる。自分自身が全く変えられる必要を悟るが、自分を捨てる務めを引き受けようとはしない。だから、自分の罪が明るみに出ると怒り、

弟子たちがイエスから離れたときのように、つまずいて去って行き、『これは聞きにくい言葉だ。だがそれを聞いていられようか』とつぶやく。」『The Desire of Ages』392頁。

「カペナウムの会堂」で「試みを受けた魂たち」は、キリストが自分の肉を食べ、自分の血を飲まねばならないと言われたとき、それが霊的な真理を伝えるためにご自身の実際の御からだを用いておられたのだということを理解するのを拒んだ。それはヨハネの福音書第2章で神殿についてなされたのと同じの予言的表現であった。「文字どおりのものが霊的なものに先立ち、それを表す」という原則が「受け入れがたい言葉」だと見なされ、彼らがそれを「聞こう」とはしなかったとき、彼らは背を向け、二度と彼とともに歩むことはなかった。それはヨハネの福音書第6章66節（666）で起こったが、これはまもなく到来する「日曜法」を表しており、それは1844年10月22日に予表され、さらにそれ自体がカルバリの十字架によって予表されていた。

その時から、彼の弟子たちの多くは離れ去り、もはや彼と共に歩まなくなった。ヨハネの福音書 6:66

ヨハネによる福音書第2章で、聖霊は弟子たちの心を導いて、神の熱心を述べる預言を『思い起こさせた』。そして、「zealous」という語は、ヘブライ語でもギリシア語でも「jealous」と同じ語である。

あなたの家を思う熱心が私を食い尽くし、あなたをそしめる者たちのそしりが私の上に降りかかっている。詩篇 69:9。

神の熱心、すなわち神のねたみは、神が「ねたむ神」であるというご性質の一要素を表しており、そのねたみは、神を憎む者たちの上に三代、四代にわたって現れる。ヨハネ第2章において、聖霊は、契約の使者によって成し遂げられる清めが第四の、最後の世代に起こることを示していた。ただし、最後の世代の杯が満ちるときにも、第三の世代の者がなお幾人か残っている。その世代は姦淫の世代、まむしのすえである。

モーセは第四世代を表しており、そのときモーセは四十六日間、神殿の建設についての教えを受けた。その日々に彼は律法を受け、その律法は第二戒において、神のねたみが第三代および第四代に現れることを示している。

彼はアブラムに言った。「確かに知っておけ。あなたの子孫は自分たちのものではない地で寄留者となり、その民に仕え、そしてその民は四百年のあいだ彼らを苦しめる。だが、彼らが仕えるその国をも、わたしは裁く。そののち、彼らは多くの富を携えて出て来るであろう。あなたは平安のうちに先祖のもとに帰り、よい老年に達して葬られる。だが四代目に、彼らは再びここへ帰って来る。アモリ人の不義は、まだ満ちていないからである。」創世記 15:13-16

古代イスラエルの最後の世代に、ペテロが「霊の家」と呼んだキリスト教会の神殿が建てられた。その歴史の中で、神は熱心に神殿を清められたとき、二度、そのねたみを現された。1844年に神はミラー派の霊的な神殿を建て上げ、再び、かつての選民を顧みられなかった。その歴史において契約の使者は1844年10月22日に突然来られた。

彼の現れはウィリアム・ミラーの宣教活動を通して備えられていた。プロテスタントとミラー派が1844年10月22日に近づくとつれ、二つのグループが試された。プロテスタントの試練は、1798年に第一の天使が到来し、終わりの時が訪れた時に到来した。レビの子らを「清め、浄化する」べきメッセージが1831年に正式化された後、1840年8月11日に第一の天使のメッセージが力を受けたとき、プロテスタントの試練が始まった。1844年4月19日、プロテスタントはその試練に失敗し、バビロンの娘たちとなった。

その後、第二の天使が到来し、ミラー派の信仰は試され、清めと粛清が成し遂げられた。8月12日から17日にかけてエクセターのキャンプ集会で第二の天使のメッセージが強められたとき、ミラー派の間で賢い者と愚かな者の分離という試しが成就した。

賢い者と愚かな者の違いは油であり、それは真夜中の叫びの預言的メッセージであった。1844年10月22日に第三の天使が到来したとき、神殿は（四十六年かけて）建てられていた。その時、契約の使者が突然ご自分の神殿に来られた。

ダニエル書8章14節に示されている、聖所の清めのために私たちの大祭司としてキリストが至聖所に来られること、ダニエル書7章13節に示されている人の子が「日の老いたる者」のもとに来られること、そしてマラキが予告した主がご自分の宮に来られることは、いずれも同じ出来事の描写である。また、これはマタイ25章の十人の乙女のたとえにおいてキリストが述べられた、花婿が婚礼に来ることによっても表されている。『大争闘』426ページ。

そのとき契約の使者は、マラキ書3章でレビの子らとされるミラー派の弟子たちを清め、精錬する働きを始めた。

第一と第二の天使のメッセージのもとで花婿を迎えに出て行った多くの者が、第三の、世に与えられる最後の試練のメッセージを拒んだ。そして最後の呼びかけがなされるときにも、同様の立場が取られるだろう。

「このたとえ話のあらゆる細部は、注意深く研究されるべきである。私たちは、賢い乙女たちか愚かな乙女たちのいずれかに象徴されている。」Review and Herald, 1899年10月31日。

1840年8月11日に第一天使のメッセージが強められたとき、多くの人々がミラー派運動に加わった。次いで1844年4月19日には、多くの人々がその運動から離れた。1844年10月22日には、信仰によって至聖所に入った人々はおおよそ五十人であったというのが伝統的な見解である。最初に第三天使の光に従った者の数がおおよそ五十人であったと仮定すると、第一と第二の天使のメッセージを受け入れた「多くの」人々が「第三、すなわち最後の試練のメッセージ」を拒んだ、と知らされているとき、それは何を意味するのか。

契約の使者は突然ご自分の宮に来られ、第三天使の経験へと進んだ五十人に、天の聖所の光と第三天使のメッセージを明らかにされたが、彼らは当初は散り散りであった。彼らのそのときの失望は最初の失望よりも大きかったが、もっとも、ホワイイト姉妹によれば、その失望は十字架の後の弟子たちほどではなかった。

二つの並行する歴史のいずれにおいても、キリストは失望した者たちにご自身の預言の御言葉を開かれた。1850年までに、ホワイイト姉妹は、主がそのときご自分の民を集めるた

めに再び御手を伸ばしておられると示されたと述べている。

[1850年]9月23日、主は、御自分の民の残りの者を回復するために二度目に御手を伸ばされたこと、そしてこの集めの時には努力を倍加しなければならないことを私に示された。散らしの時にはイスラエルは打たれ、引き裂かれた。しかし今、集めの時には、神はご自分の民を癒し、包み治してくださる。散らしの時には、真理を広めるための努力はほとんど効果がなく、ほとんど何も成し遂げられなかった。しかし、神がご自分の民を集めようと御手を伸ばされたこの集めの時には、真理を広める努力は所期の効果を挙げるだろう。すべての者はこの働きにおいて一致し、熱心であるべきである。私は、今の集めの時に私たちを律する規範として散らしの時を引き合いに出すのは、誰にとっても恥ずべきことだと見た。というのは、もし神が今、当時以上のことを私たちのためになさらないなら、イスラエルは決して集められることはないからである。真理は、説教されるのと同様に、紙上で公刊されることも同じくらい必要である。Review and Herald、1850年11月1日。

十字架の時、弟子たちは散らされていたが、その歴史において、三日後に彼は散らされた弟子たちを集め始められた。1844年の終わりからおよそ三年後、キリストは散らされたご自分の群れを集め始められた。その歴史において、彼はご自分の民を導いて出版活動を始めさせ、ハバククの二つの表のうち第二のものを刊行させた。それは1850年末に製作され、1851年1月には「Review and Herald」で販売が開始された。

1843年の図表は、第一と第二の天使のメッセージの歴史の中で築かれた神殿を清めたメッセージの、目に見える形の表現であった。第三の天使の到来とともに、神はご自身の働きを完成し、ご自分の民を家に連れ帰るご計画であったが、彼らは古代イスラエルがそうしたように反逆し、こうして古代と現代のイスラエルの双方は荒野をさまよう運命づけられた。もし、第三の天使の光を最初に受け入れたアドベンチストたちが、信仰によって歩み続け、そのメッセージの目に見える表現である1850年の図表を携えていたなら、彼らはイエスの再臨を迎え入れ、家に帰ることができただろう。だが彼らは、ヨシヤとカレブ、そして十人の不忠実な斥候の歴史を繰り返す運命にあった。

もしアドベンチストたちが、1844年の大失望の後も信仰を堅く保ち、神の開かれる摂理に一致して前進し、第三天使のメッセージを受け入れ、聖霊の力によってそれを世に宣べ伝えていたなら、彼らは神の救いを目の当たりにし、主は彼らの努力とともに力強く働かれ、働きは完成し、キリストはすでに、御自分の民をその報いにあずからせるためにお迎えに来られていたであろう。しかし、その失望に続く疑いと不確かさの時期に、多くの再臨信徒がその信仰を捨ててしまった……。このようにして働きは妨げられ、世界は暗闇の中に残された。もしアドベンチストの全体が神の戒めとイエスの信仰に団結していたなら、私たちの歴史はどれほど大きく違っていただろうか！ Evangelism, 695.

バプテスマのヨハネとウィリアム・ミラーは、キリストが突然来られて、聖霊の力のもとで救いのメッセージを全世界に運ぶ民を清めるための道備えをした。キリストの弟子たちはその任務を果たしたが、アドベンチズムの初期はそうではなかった。1856年までに彼らはラオデキアの状態に陥り、「七つの時」という進んだ光を拒み、1863年には、間もなく到来する日曜法に至るまで続く反逆のエスカレーションの過程を開始した。1863年の

反逆は、十人の斥候の反逆によって型示されていた。荒野での四十年の放浪の終わりに、古代イスラエルは同じ試練にもう一度直面させられ、そのことが、現代イスラエルが初めの試練へと引き戻されることの例となった。

カデシュにおける十人の斥候の反逆は、四十年後、再びカデシュで繰り返された。荒野での四十年の放浪をもたらした十人の斥候の反逆は、現代イスラエルがラオデキアの荒野で自らの放浪を招いた1863年の反逆を表している。四十年の終わりに古代イスラエルは再びカデシュへ導かれたが、それは、1863年の反逆においてミラー派アドベンチスト運動をふるいにかけて試練が、契約の使者が再び突然ご自分の宮に来られる時に繰り返されることを示している。

次の記事でこの研究を続けます。

ギレアドとバシャンの征服に際しては、約四十年前、カデシュでイスラエルを長い荒野の放浪へと運命づけた出来事を思い起こす者が多くいた。彼らは、約束の地についての斥候の報告が多く点で正しかったことを認めた。町々は城壁に囲まれ、非常に大きく、そこには巨人が住んでおり、彼らに比べればヘブライ人はまるで小人同然だった。しかし彼らは今や、父祖たちの致命的な誤りは神の力を信頼しなかったことにあったと悟った。まさにそれだけが、彼らが直ちにその良き地に入ることを妨げていたのだ。

彼らが最初にカナンに入ろうと準備していたとき、その企てには今よりはるかに少ない困難しか伴っていなかった。神はご自分の民に、もし彼らが御声に従うなら、神が彼らに先立って行き、彼らのために戦うと約束し、また、その地の住民を追い払うためにスズメバチを送るとも約束された。諸国民の恐怖心はまだ広くかき立てられておらず、彼らの進軍に対抗する備えもほとんど整っていなかった。しかし今、主がイスラエルに前進せよと命じられたとき、彼らは油断のない強力な敵に向かって進まねばならず、彼らの接近に抵抗するために備えてきた大規模でよく訓練された軍勢と戦わなければならなかった。

オグとシホンとの戦いにおいて、民は、かつて彼らの父祖が著しく失敗したのと同じ試練にさらされた。しかし、その試練は、神がイスラエルに前進せよと命じられた時よりも、はるかに厳しいものとなっていた。主の名によってそうするよう命じられたときに前進を拒んで以来、彼らの行く手の困難は著しく増していた。神はいまもなお、このような仕方でご自分の民を試される。そして彼らとその試練に耐えられないなら、神は彼らを再び同じ地点に連れ戻し、二度目には試練はさらに身近に迫り、先るときよりも厳しいものとなる。これは彼らとその試練に耐えるまで続けられる。あるいは、なおも反逆的であるなら、神は彼らからご自分の光を取り去り、彼らを暗闇の中に残す。『族長と預言者』436、437。